

The Creative Writing Process of Taro Tominaga's Poems Unpublished within His Lifetime

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5788

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

杉 浦 静

本稿は、富永太郎草稿の画像データベース化のための基礎作業である。

本稿では、富永の生前未発表の各詩篇毎に生成過程を整理し、自筆の詩帖・草稿から翻刻し、本文化した。詩篇の配列は、各詩篇の最終形の記載草稿の神奈川近代文学館における整理番号順である。これは、神奈川近代文学館の草稿整理番号が、概ね詩篇の製作日付順に振られていることにしたがったものである。詩帖中の断片稿・抹消稿については、詩帖の記載頁順に配列した。

なお、中原中也記念館蔵の富永太郎自筆草稿及び書簡中の次のテキストについては、本稿には掲出していない。他日に追補する予定であることをお断りしておく。

中也記念館蔵草稿

- | | | |
|--------------|----|----------|
| 1. 「遺産配分書」 | 三枚 | 文房堂製原稿用紙 |
| 2. 「晩春小曲」 | 一枚 | 便箋 |
| 3. 「情熱的なフーガ」 | 一枚 | 便箋 |
| 4. 「パイプ」 | 二枚 | 便箋 |
- 中也記念館蔵書簡中の詩稿

1. 「警戒」詩稿

大正12年5月23日付正岡忠三郎宛書簡 整理番号90

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

各詩篇の校異においては、現存する、独立した用紙記載稿、詩帖等中記載稿をその推定制作順（生成順）に従って配列した。

最終形態が、抹消された詩篇については、タイトルに「抹消稿」と付記し、校異欄に、抹消形態等を含め註記した。

題名が附されていない詩篇及び最終形態で題名が抹消された詩篇については、便宜上第一行を「」で括ったものをもって、題名の代用とすることにする。なお、第一行末尾に句読点が附されているものは、代用題名からは句読点を外すことにした。

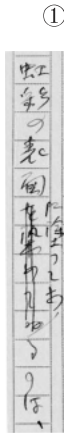
本稿に翻刻した詩帖・草稿は、神奈川近代文学館の所蔵になるものである。草稿の使用を許可された、富永一矢氏・神奈川近代文学館に感謝申し上げる。

凡例

- 1 複雑な手入れ・推敲のある草稿の場合、まず第一形態を示して、行頭に行番号を付す。題名・副題・行アキは算入しない。
- 2 第一形態成立後の手入れは、推敲のある行の番号を掲げてその行の推敲過程を表記する。推敲過程の表記は次のとおり。異文の生じているところから「」印を開いて、まず第一形態を

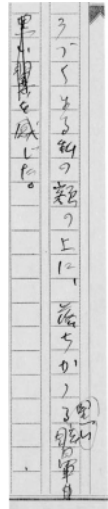
例

- 示し、以下推敲段階における手入れを「↓」で順に示し、推敲の最終形を記したあと、「□」印で閉じる。
- 3 削除は「…… ↓ 削除」。追加・挿入は、「ナシ ↓ ……」のように示す。
- 4 「□」内でさらに部分的推敲がある場合は、そこを【】で括って示す。
- 5 草稿における判読困難の文字、字体不明瞭の文字は、また一二画だけで書きかけの文字は、「（）」で括って表すか、または□□のように表す。推定した文字も「（）」で括って表す。
- 6 右の原則によって示しきれない場合は、「（）」を用いて小活字で説明を加える。



②

12行 虹彩の表面「を染めてる↓に塗つてあ」るのは、
右は、12行目の「虹彩の表面を染めてるのは」が、手入れで「虹彩の表面に塗つてあるのは」になったことを示す。



③

21行 うづくまる私の額の上に、落ちかゝる「ナシ↓黒い」眩暈
「の黒い翼↓削除」を感じた。
右は、21行目の「落ちかゝる眩暈の黒い翼を感じた。」が、手入れで「黒い」が挿入され、「の黒い翼」が削除されて、「落ちかゝる黒い眩暈を感じた。」になったことを示す。



25行 に「上つ【ナシ↓て来】た。↓さし上つた。」
右は、「に上つた。」↓「に上つて来た。」↓「にさし上つた。」の順に書き改められたことを示す。

1 深夜の道士

1 草稿1

《草稿番号》 40115

《用紙》 ノート（青色罫24本）断片 4葉

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》

etude

1 人語なく、月なき今宵、
色ねびし窓布の吐息する

「古」↓「こ」の古城なる図書室の一隅に、
遠き外国の材もて組める

5 ありし日よりの凝固せる大気为重圧に
生得の歪「？」↓削除 悉皆消散せる
遠き「外↓異」国の材もて組める

残忍の相ある堅き檠几に、
一片のこの肉体を枯坐せしめ、

10 生気なく効なき「日頃の↓削除」修道なれど、
なほそが為に日頃捨「□」↓離 せるこの真夜中の休息を
貪りて、また貪ら「ん↓う」とはする。

青ほやに銀の台せる古きらんぷに
在りし世になほ今のごとく

15 この陰惨の図書室に

虚しく求め、虚しく去にし
在りし世の人々の息の残った
この陰惨の図書室に
四周に、はた床 上に錯□と積みなせる
20 これら怪奇の古書冊等を照し出せば
一切は錯落の影を「堪」↓湛へ
影は層々の影を生み……

何物の驕慢ぞ——深夜のこの倦怠に
数夥しき侏儒のやから
25 薄明のわだつみの泡のごと「く」↓削除
おのがじゝ濃藍色の影に「よ」↓抛り
乱舞して湧き出で、

葡萄の種め「いた」↓きし「つぶら 眼を「めぐる」↓むき」出し、今
「今」↓悔「慢の、嘲笑を踏歌する。
30 風強き夜はその息吹なほも聞かれぬべき、
在りし世の虚しき鍊金の道士、呪文の行者らが
宿命の氷れる嵐
狂ほしく胸の扉に吹き入り
肉枯れし腕をさしのべ、

35 虚しき「月（にくづきのみ）」↓削除「指先に現象の秘奥まさぐり
まことの君に帰命せん心も失せて、
難行の座に、放心し、「仮睡する」↓削除
仮睡する……。

(二二、八、一七)

右に對しやや薄いブルーブラック・インクで次の手入れがなされて
いる。

2行 窓 布の吐息する

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程(1)

3行 の「一隅に、↓中央【に↓の】」
3行の次（矢印で7・8行目をここに移動）
遠き「外」↓異「国（ルビ「くに」を削除）の材もて組める
残忍の相ある堅き槩凡に、

4行 「遠き異国の材もて組める」↓削除
6行 （行末より矢印で9行目の次に移動）
7・8行 （矢印で3行目の次に移動）
9行の次（矢印で6行目をここに移動）
10行 「生氣↓勇猛」なく効なき修道なれど
13行 青「ほや」↓笠に銀の台「せる」↓ある「古「き」↓い」らんぷ
「に」↓が
14↓17行

「在りし世になほ今のごとく」↓削除
「この陰惨の図書室に」↓削除
「虚しく求め、虚しく去にし」↓削除
「在りし世の人々の息の残った」↓削除
18行 この陰惨の「ナシ」↓大「図書室「に」↓の」
19行 床 上に「錯□」↓高々と積みなせる
19行の次（用紙左端に記入した詩行を矢印で挿入）
「ナシ」↓ありし世の虚しき鍊金の道士、呪文の行者【ナシ」↓ら
の」

22行 影は層々の影を生「み」↓む「……」
23行 深夜「の」↓削除「この「ナシ」↓一切の」倦怠「に」↓の時」
24・25行（矢印で24行目と25行目を入れ替える）

「夥しき侏儒のやから／薄明のわだつみの泡のごとく」↓薄明のわ
だつみの泡の【ごとく】やうに／夥し【き】い侏儒のやから」
27行 「乱舞して湧き出で、」↓削除「（行頭に④と記した後行間に書き直
す）乱舞して湧き出で、」
28行 「葡萄の種め「きし」↓いた」つぶら眼をむき出し、今

29行 侮慢「の↓を」、嘲笑を踏歌す「る。↓れば、」

29行の次（紙葉左端に記入してから矢印でここに挿入）

「ナシ↓その古城に永劫棲むといひ、」

（挿入後、この行及び30・31行をまとめて大きな×印で削除。

その後29行の次に「一行あけ」と記入）

33行 狂ほしく胸の扉に吹き入「り↓って」

34行 「ナシ↓今は、はや」肉枯れし腕「を↓削除」さしのべ、

35行 「虚しき↓はかなき」指「先↓頭」に現象の秘奥まさぐり

以上の手入れ結果を整理して示せば次のとおり

etude

人語なく、月なき今宵、

色ねびし窓布の吐息する

この古城なる図書室の中央の、

遠き異国の材もて組める

残忍の相ある堅き槩几に、

ありし日よりの凝固せる大気の重圧に

一片のこの肉体を枯坐せしめ、

生得の歪悉皆消散せる

勇猛なく効なき修道なれど、

なほそが為に日頃捨離せるこの真夜中の休息を

貪りて、また貪らうとはする。

青笠に銀の台ある古いらんぷが

この陰惨の大図書室の

四周に、はた床 上に高々と積みなせる

ありし世の虚しき鍊金の道士、呪文の行者らの

これら怪奇の古書冊等を照し出せば

一切は錯落の影を湛へ

影は層々の影を生む……

何物の驕慢ぞ——深夜この一切の倦怠の時

薄明のわだつみの泡のやうに

数夥しい侏儒のやから

おのがじゝ濃藍色の影に拠り

乱舞して湧き出で、

葡萄の種めいたつぶら眼をむき出し、今

侮慢の、嘲笑を踏歌すれば、

宿命の氷れる嵐

狂ほしく胸の扉に吹き入って

今は、はや肉枯れし腕さしのべ、

はかなき指頭に現象の秘奥まさぐり

まことの君に帰命せん心も失せて、

難行の座に、放心し、

仮睡する……。

（二一、八、一七）

《補注》 紙葉1右側下部に「悉」の書きかけがある。

2 草稿2

《草稿番号》 40114

《用紙》 便箋

《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク

《校異》

深夜の道士

人語なく、月なき今宵
色ねびし窓帷の吐息する
此の古城なる図書室の中央の
遠き異国の材もて組める
残忍の相ある堅き「檣几↓牀机」に
ありし日よりの凝固せる大氣の重圧に
生得の歪悉皆消散せる
一片の此の肉体を枯坐せしめ
勇猛なく効なき修道なれど
なほそがために日頃捨離せる「この↓削除」真夜中の休息を
貪りて、また貪らうとはする。

青笠に銀の台ある古いらんぷが
この陰惨の大図書室の
四周に、はた床 上に高々と積みなせる
ありし世の虚しき鍊金の道士、呪文の行者らの
これら怪奇の古書冊「ら↓削除」を照し出せば
一切は錯落の影を湛へ
影は層々の影を生「み↓削除」む……

何者の驕慢ぞ——「深夜この↓この深夜（最初「深夜この」と書き、入れ替える）」一切倦怠の時
薄明のわだつみの泡のやうに
数夥しい侏儒のやから
おのがじゝ濃藍色の影に抛り
乱舞して書き出で、

「葡萄↓竜眼肉」の種めいたつづら眼をむき出し、今

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

侮慢を、嘲笑を踏歌すれば
宿命の氷れる嵐
狂ほしく胸の扉に吹き入つて
今は、はや、肉枯れし腕さし延べ
はかなき指頭に現象の秘奥まさぐり
まことの君に帰命せん心も失せて
難行の座に、放心し、仮睡する……。

3 草稿3

《草稿番号》 40113
《用紙》 「丸善特製 一」原稿用紙（25字×24行） 2枚
《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク
《校異》

深夜の道士

人語なく、月なき今宵
色ねびした窓帷の吐息する
此の古城なる図書室の中央の
遠き異国の材もて組める
残忍の相ある堅き牀机に
ありし日よりの凝固せる大氣の重圧に
生得の歪悉皆消散せる
一片の此の肉体を枯坐せしめ
勇猛なく効なき修道なれど
なほそが為に日頃捨離せる真夜中の休息を
貪りて、また貪らうとはする。
（「一行あける」と記入）

青笠に銀の「台↓臺」ある古いらん「む↓ぶ」が

この陰惨の大図書室の「中央↓削除」

四周に、はた床上に高々と積みなせる

ありし世の虚しき鍊金の道士、呪文の行者らの

これら怪奇の古書冊を照し 出「ナシ↓だ」せば

一切は錯落の影を湛へ

影は層々の影を生む「……↓」

何者の驕慢ぞ——この深夜一切倦怠の時

薄明のわだつみの泡のやうに

数夥しい侏儒のやから

おのがじゝ濃藍色の影に抱り

乱舞して湧き出でゝ

龍眼肉の核めいたつぶら眼をむき出し、今

侮慢を、嘲笑を踏歌すれば

宿命の氷れる嵐

狂ほしく胸の扉に吹き入つて

今は、はや、肉枯れし腕さし延べ

はかなき指頭に現象の秘奥まさぐり

まことの君に帰命せん心も失せて

難行の坐に、放心し、仮睡する……。

2 夜の賛歌

1 草稿1

《草稿番号》 40117

《用紙》 ノート（青色罫24本） 3葉

《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク

《校異》

Etude

夜の讃歌

「――囚はれ□人の歌へる↓削除」

地は定形なく曠空しくして黒暗淵の面

にあり神の霊水の面を覆ひたりき

——創世記

「暗黒↓黒暗」の潮、今満ちて（潮、今「横にカッコを付している。読点を削除する意図か）

晦「洪↓冥」の夜ともなれ「（ど）↓ば」

仮構の万象そが「粘↓閔」性を失し

解体の喜びに「心おのゝき↓酔ひしれて」

「ナシ↓心おのゝき」

「混沌の故郷↓削除」混沌の母の胸へと「急ぎ【行く。↓徒ちゆく。】

↓没入する。」

窓外の膚白き一樹は

「室↓扉」漏る「↓↓削除」赤き、燈（、」「横にカッコを付している。

一字アキを削除する意図か）に照らされて

いかつく張った大枝も、金属性の葉末「諸共↓もろとも↓もろ共」

母胎の「温み未だ失はぬ孩児の↓汚物まだ拭はれぬ」

「ぶよく」とした↓孩児の」四肢の相を示現する。

かゝる和毛の如き夜は

コスモスといふ白「白↓削除」日の虚妄を破り

「時劫↓日光」の重圧に、化石の痛苦

味ひつゝある若者らにも

母親の乳房まさぐる幼年の

至純なる淫「逸↓猥」の「ナシ↓皮膚」感覚を「取↓と」り戻し

劫初なる「水↓淵」の面より汲み取れる

ほの黒き祈り心を「〔滴〕↓削除」したゝらす。

.....

おんみ、天鷲絨の黒衣せる夜

「おんみ 肉にして且つ霊なる夜↓香油にうるほへる、おんみ聖なる夜」

湿りたる我が双つの眼を

おんみの「柔↓削除」胸に埋むるを許したまへ。

二一、九、四 完成

2 草稿2

《草稿番号》 40116

《用紙》 「丸善特製 二」 原稿用紙（25字×24行） 2枚

《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク

《校異》

夜の讃歌

地は定形なく曠空しくして黒暗淵の面
にあり神の霊水の面を覆ひたりき

——創世記

「黒暗↓削除」

黒暗の潮、今満ちて

晦冥の夜ともなれば

仮構の万象そが閔性を失し

解体の喜びに酔ひしれて

心おのゝき

混沌の母の胸へと「没↓帰」入する。

窓外の膚白き一樹は

扉漏る赤き燈に照らされて

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

いかつく張った大枝も、金属性の葉末もろ共

母胎の汚物まだ拭はれぬ

孩児の四肢の相を示現する。

かゝる和毛の如き夜は

コスモスといふ白日の虚妄を破り、

日光の重圧に、化石の痛苦（鉛筆で「化石の痛苦」を次行行頭に移動する指示）

味ひつゝある若者らにも

母親の乳房まさぐる幼年の

至純なる淫猥の皮膚感覚をとり戻し、

劫「初↓初（補正）」なる淵の面より汲み取れる

ほの黒き祈り心をしたゝらす……

おんみ、天鷲絨の黒衣せる夜、

香油にうるほへる、おんみ聖なる夜、

湿りたる我が双つの眼を

おんみの胸に埋むるを許したまへ。

二一、九、

3 詩帖稿

《草稿番号》 40191-22

《用紙》 詩帖 I 44-45頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

夜の讃歌

地は定形なく曠空くして黒暗淵の面にあり神の霊水の面を覆ひたりき

——創世記

黒暗の潮 今満ちて
晦冥の夜ともなれば
仮構の万象そが閔性を失し
解体の喜〔こ〕↓削除〔こ〕に酔ひ痴れて
心おのゝき
混沌の母の胸へと帰入する。

窓外の膚白き一樹は
扉漏る赤き灯に照されて
いかつく張った大枝も、金属性の葉末もろ共
母胎の汚物まだ拭はれぬ
孩児の四肢の相を示現する。

かゝる和毛の如き夜は
コスモスといふ白日の虚妄を破り、
日光の重圧に、「ナシ」↓化石の痛苦
「化石の痛苦」↓削除 味ひつつある若者らにも
母親の乳房まさぐ「りつゝあ」↓削除 る幼年の
至純なる淫猥の皮膚感覚をとり戻し
劫初なる淵の面より汲み取れる
ほの黒き祈り心をしたゝらす「。↓……」

おんみ、天鷲絨の黒衣せる夜、
香油にうるほへる、おんみ聖なる夜、
涙する我が双「つ」↓削除の眼を

おんみの胸に埋むるを許したまへ。

Septembre '21

3 「ありがたい静かなこの夕べ」

1 草稿

《草稿番号》 40118
《用紙》 「丸善特製 一二原稿用紙（25字×24行） 1枚
《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク
《校異》

ありがたい静かなこの夕べ
何とて我がこゝろは波うつ

いざ今宵一夜は
われととり出でた

この心の臓を
窓ぎわの白き皿にのせ
心静かに眺めあかさう
月も間もなく出るだらう

一一、一二、一

2 詩帖稿

《草稿番号》 40191-19
《用紙》 詩帖 I 38頁
《筆記具》 鉛筆
《校異》

○
ありがたい静かなこの夕べ、
何とてわが心は波うつ。

いざ今宵一夜は
われととり出でたこの心の臓を
窓ぎわの白き皿に載せ、
心静かに眺めあかさう。

月も間もなく出るだらう。

Decembre 1921.

4 影絵

1 草稿1

《草稿番号》 40120

《用紙》「丸善特製 一二」原稿用紙（25字×24行） 1枚

《筆記具》 鉛筆

《校異》

第一形態は次のとおり

影絵

半缺けの日本にっぽんの月の下を
一寸法師の夫婦が急ぐ

せかくと——何に追はれる？
そろはぬがちの「ナシ↓その」足どりは……

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

二人ながらに 心許ない前かゞみ
さても毒々しい二つの鼻
のシルエット

手をひきあつた影法師が
欄かんの擬宝珠の下を通る
（冷めし草履の地を掃く音は
もはやきこえぬ）

「月は↓削除」半缺けの月は夜な夜なの
柳との逢引の時刻ときを忘れてゐる

一一一、三、一八、
（二高入学試験初日の晩）

これに対して、同じ鉛筆で手入れがなされる。

影絵

半缺けの日本にっぽんの月の下を
一寸法師の夫婦が急ぐ

「せかくと——何に追はれる？

そろはぬがちの【ナシ↓その】足どりは……↓削除（二行後に移す）」

二人ながらに「心許ない↓僧でいらしい」前かゞみ
さても毒々しい二つの鼻のシルエット

「ナシ↓生白い河岸【みち（「の」を「に」に変える）↓の通に】
倒れた柳の影をふんで」

「ナシ」↓（二行前から移す）せか／＼と——何に追はれる？
そろはぬがちのその足どりは……」

手をひきあつた影法師が

「ナシ」↓あれもう——遠見の橋の」

「欄かんの↓黒い」擬宝珠の下を通る

（冷めし草履の地を掃く音は

もはやきこえぬ）

半缺けの月は 「夜な夜なの↓柳との」

「柳との↓削除」逢引の時刻^{とき}を忘れてゐる

二二、三、一八、

（二高入学試験初日の晩）

以上の手入れの結果、次の最終形態が成立する。

影絵

半缺けの日本^{にっぽん}の月の下を

一寸法師の夫婦が急ぐ

二人ながらに 僧ていらしい前かゞみ

さても毒々しい二つの鼻のシルエット

生白い河岸の通に

倒れた柳の影をふんで

せか／＼と——何に追はれる？

そろはぬがちのその足どりは……

手をひきあつた影法師が

あれもう——遠見の橋の

黒い擬宝珠の下を通る

（冷めし草履の地を掃く音は

もはやきこえぬ）

半缺けの月は 柳との

逢引の時刻^{とき}を忘れてゐる

二二、三、一八、

（二高入学試験初日の晩）

2 草稿2

《草稿番号》 40119

《用紙》 「丸善特製 二二原稿用紙（25字×24行） 1枚

《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク

《校異》

第一形態は次のとおり

影絵

1半缺けの日本^{にっぽん}の月の下を

一寸法師の夫婦が通る

二人ながらに 僧体^{てい}「や↓削除」ら「ナシ」↓しい」前かがみ

さても毒々しい二つの鼻のシルエット

5生白い河岸の通に染め抜いた

柳並木の影をふんで

せか／＼と——何に追はれる？
揃はぬがちの其の足どりは……

手を引きあつた影の道化は

10 あれもう——そなた遠見の橋の

黒い擬宝珠の下を通る

(冷飯草履の地を掃く音は

もはや聞こえぬ)

半缺「の↓け」の月は 柳との

15 逢引の時刻を忘れてゐる

二二、三、一八、

これに対して、同じブルーブラックインクで手入れがなされる。

題名 「影↓影」 絵

2 行 夫婦が「通る↓急ぐ」

3 行 二人ながらに「僧体らしい↓思ひつめたる」前かがみ

4 行 さても「毒々↓どく／＼」しい

5 行 生白い河岸「の通に↓をまだらに」

7 行 何に追はれる「?↓削除」

9 行 手を「引↓ひ」き

10 行 あれもう「——↓削除」

12 行 行頭の丸括弧を削除

13 行 行末の丸括弧を削除

14 行 半缺けの月は「柳との↓今宵 柳との」

以上の手入れの結果、次の最終形態が成立する。

影絵

半缺けの日本にっぽんの月の下を
一寸法師の夫婦が急ぐ

二人ながらに 思ひつめたる前かがみ
さてもどく／＼しい二つの鼻のシルエット

生白い河岸をまだらに染め抜いた

柳並木の影をふんで

せか／＼と——何に追はれる

揃はぬがちの其の足どりは……

手をひきあつた影の道化は
あれもうそなた遠見の橋の

黒い擬宝珠の下を通る

冷飯草履の地を掃く音は

もはや聞こえぬ

半缺けの月は 今宵 柳との

逢引の時刻を忘れてゐる

二二、三、一八、

3 詩帖稿

《草稿番号》 40191-20

《用紙》 詩帖 I 39-40 頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

影絵

半缺けの日本につぼんの月の下を、
一寸法師の夫婦が急ぐ。

二人ながらに 思ひつめたる前かがみ、
さても毒々しい二つの鼻のシルエット。

生なま白い河岸をまだらに染め抜いた、
柳並木の影を踏んで、

せかせかと——何に追はれる、
揃はぬがちのその足どりは？

手をひきあつた影の道化は
あれもうそこな遠見の橋の
黒い擬宝珠の下を通る。
冷飯草履の地を掃く音は
もはや聞こえぬ。

半缺けの月は、今宵、柳との
逢引とぎの時刻を忘れてゐる。

Mars 1922

5 [月青く人影なきこの深夜]

1 草稿1

《草稿番号》 40122

《用紙》「丸善特製 一」原稿用紙(25字×24行) 1枚

《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク

《校異》

第一形態は次のとおり。

1月青く人影なき深夜の巷を
家々の閨を「□ ↓削除」かいま見つゝ、
白き街を「と ↓疾」くよぎる侏儒の群あり

人は今おろかなる様さまに立てる
5かぐろき屋根の下に

臥ふし「床 ↓ど 所」ありて 人は今眠れり
いぎたなくおのが褥に横りて
家々はかく遠く連りたれど
眠の罪たるを知るものなし

10月も今「□ ↓削除」宵その青きを恥ぢず
快樂けらくを 欲ほりほする人間の流す
いつはりの涙に媚ぶと見えたり

かゝる安逸の領ずる国なれば
おもはゆげもなく光れる道を
15あらん限りの男をうしろみな 女の肌を見んとて
魔性の侏儒等は 心たのしみ
かげくらき家々の軒の下を

影のごと 走る……走る……

(二二、三、二八)

これに対して、同じペン・ブルーブラックインクで手入れがなされ
ている。

1行 月青く人影なき「ナシ↓この」深夜「の巷を↓削除」
 3行 白き「街↓巷」を「と↓疾」くよぎる侏儒の「群↓影」あり
 4行 「人は今↓おろかにも」「おろかなる【ナシ↓黒き】」様^{さま}に立て
 る↓状^{さま}して立てる】↓黒々と立てる屋根の下に」
 5行 「かぐろき屋根の下に↓削除」
 6行 人は「今↓いきたなく」眠れ「り↓るなり↓り」
 7行 「いきたなくおのが尊に横りて↓削除」
 9行 「ナシ↓何故に↓削除」眠の罪たるを知るもの「なし↓はあらず↓絶えてなし↓絶えてあらず」
 10行 その青き「ナシ↓光」を恥ぢず
 13行 安逸の「領↓領」ずる「国↓夜」なれば
 14行 「おもはゆげもなく光れる道を↓削除」
 15行 あらん「限↓限」りの
 16行 魔性（ナシ↓「魔性」を丸く囲む）の侏儒「等↓削除」は
 17行 「かげくらき↓おもはゆげもなく」「家々の↓削除」軒「の下を↓より軒へ」
 18行 「影のごと↓白き巷を」「走る……走る……↓よぎりゆくなり」

以上の結果、最終形態は次のとおり。

月青く人影なきこの深夜
 家々の闇をかいま見つゝ、
 白き巷を疾くよぎる侏儒の影あり
 おろかにも黒々と立てる屋根の下に
 臥所^{ふしど}ありて 人はいきたなく眠れり
 家々はかく遠く連りたれど
 眠の罪たるを知るもの絶えてあらず

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

月も今宵その青き光を恥ぢず
 快樂^{けつらく}を欲^ほする人間の流す
 いつはりの涙に媚ぶと見えたり
 かゝる安逸の領^{をとしをみな}ずる夜なれば
 あらん限りの男 女の肌を見んとて
 魔性の侏儒は 心たのしみ
 おもはゆげもなく軒より軒へ
 白き巷をよぎりゆくなり

（二二、二三、二八）

《補注》裏面に「T」「T」影「YY影」のメモがある。アルファベツトは筆記体。

2 草稿2

《草稿番号》40121

《用紙》「東京 文房堂製」「10・25」原稿用紙（25字×20行） 1枚

《筆記具》細いペン、ブルーブラックインク

《校異》

月青く人影なきこの深夜
 家々の闇をかいま見つゝ、
 白き巷を疾くよぎる侏儒の影あり
 愚か「にも↓なる」状^{さま}して黒々と立てる屋根の下に
 臥所^{ふしど}ありて人はいきたなく眠れり
 家々はかく遠く連りたれど
 眠の罪たるを知るもの絶えてあらず

月も今宵その青き光を恥ぢず
快樂を「ほ」^{〔ほ〕}欲する人間の流す
いつはりの涙に媚ぶと見えたり

かゝる安逸の領する夜なれば
あらん限りの男「お」女「を」の肌を見んとて
魔性の侏儒は心たのしみ
おもはゆげもなく軒より軒へ
白き巷をよぎりゆくなり

二二、三、二八、

6 「たゞひとり 黎明の森をゆく」

1 草稿

《草稿番号》 40123

《用紙》「東京 文房堂製」「10・25」原稿用紙(25字×20行) 1
枚

《筆記具》 ペン、黒インク

《校異》

たゞひとり 黎明の森をゆく。

風は 心虚しく 幹の間を「馳る」翔り、

木々はみな その白き葉裏を反「す」。

樹の間がぐれに 足速に

白き馬を「ひ」牽「き」「て」ゆ「く」は誰ぞ。

道の辺の 齒朶の群おのゝけり。

かゝるとき 湿りたる岩根を踏めば

あゝわが出生の記憶甦へる。

二二、九、四、

2 詩帖稿

《草稿番号》 40191-22

《用紙》 詩帖 I 38頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○

たゞひとり 黎明の森をゆく。

風は心虚しく幹のあはひを翔り、

木々はみなその白き葉裏を反す。

樹の間がぐれに、足速に

白き馬を牽きゆくは誰ぞ。

道の辺の 齒朶の群おのゝけり。

かゝるとき、湿りたる岩根を踏めば

あゝ、わが出生の記憶甦へる。

Septembre 1922

7 「幾日幾夜の熱病の後なる」

1 草稿

《草稿番号》 40126

《用紙》 ノート(青色罫24本) 1枚

《筆記具》 鉛筆

《校異》

幾日幾夜の熱病の後なる
濠端のあさあけを「称↓削除」讃ふ。

琥珀の雲「ナシ↓溶けて」青空に流れ、
覚めやら「ぬ↓で」「ナシ↓水を眺むる」柳の一「連↓削除」列あり。

もやひたる「白き↓削除」ボートの赤き三角旗は
密閉せる閨房の戸をあけはなち
暁の冷気をよろこび甜むる男の舌なり。

「朝なれば人は起きて【ナシ↓急ぎ↓削除】行き交ふ↓削除」

朝なれば風は起ちて 雲母めく濠の面をわたり、
通学する十三歳の女学生の
白き靴下とスカートのあはひなる
ひかゞみの青き血管に接吻す。

朝なれば風は起ちて「湿りたる↓醒めがてなる」柳「の葉末をわ
たり」↓の葉末をなぶり」

「足「早」↓削除」

花を捧げて足速「や↓削除」に木橋をよぎる

「若き女の↓削除」反身なる若き女のもすそを反す。
その白足袋の 快き哄笑を聴きしか。

あゝ夥しき欲情は空にあり。

わが「身↓削除」肉身は卵殻の如く完く且つ脆くして
陽光はほの赤く身うちに射し入るなり。

二二、一一、二七、完

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

《補注》 草稿用紙裏面には、第6連のほか、ボードレールの詩「La Pipe」の一節（仏語原文）及びこの一節の一行ごとに単語に番号を振ったメモ、及び次の「La Pipe」翻訳断片が書かれている。

俺は火のついた俺の口から「ナシ↓立ち」騰る
ゆら／＼とした青い煙の網で
彼の人の魂を抱きしめてあやしてやるのだ。

2 草稿2

《草稿番号》 40125

《用紙》 洋紙 1枚

本紙葉には、縦3つ折り、横3つ折りの折り跡がある。

《筆記具》 ペン・黒インク

《校異》

幾日幾夜の熱病の後なる
濠端のあさあけを讃ふ。

琥珀の雲溶けて青空に流れ、
覚めやらで水を眺むる柳の「ひとつ」列あり。

もやひたるボートの赤き三角旗は
密閉せる閨房の戸をあけ放ち、
暁の冷気をよろこび「な↓甜」むる男の舌なり。

朝なれば風は起ちて雲母めく濠の面をわたり、
通学する十三歳の女学生の
白き靴下とスカートのあはひなる

ひかゞみの青き血管に接吻す。

朝なれば風は起ちて湿りたる柳の葉末をなぶり、
花を捧げて足早に木橋をよぎる
反身な「り↓る」若き女のもすそを反す。
その白足袋の快き哄笑を聴きしか。

ああ夥しき欲情は空にあり。
わが肉身は卵殻の如く完く且つ脆くして
陽光はの赤く身うちに射し入るなり。

二二、一一、二七、完

4 草稿3

《草稿番号》 40124

《用紙》「東京 文房堂製」「10・25」原稿用紙(25字×20行) 2
枚

《筆記具》 ペン、黒インク

《校異》

幾日幾夜の「ナシ↓□(一マスアキ)」 熱病の後なる
濠端のあさあけを讃ふ。

琥珀の雲「ナシ↓□(一マスアキ)」溶けて「青↓蒼」空に流れ、
覚めやらで水を眺むる柳の「列」あり。

もやひたるボートの「ナシ↓□(一マスアキ)」赤き三角旗は
密閉せる閨房の戸をあけはなち、
暁の冷気をよるこび甜むる男の舌なり。

朝なれば「ナシ↓□(一マスアキ)」↓削除「風は起ちて「ナシ↓□(一
マスアキ)」雲母めく濠の面をわたり、
通学する十三歳の女学生の
白き靴下とスカートのあはひなる
ひかゞみの青き血管に接吻す。

朝なれば「ナシ↓□(一マスアキ)」↓削除「風は起ちて「ナシ↓□(一
マスアキ)」湿り「な↓た」る柳の葉末を「わた↓なぶ」り、
花を捧げて足「早↓速」に木橋をよぎる
反身なる若き女の裳を反す。
その白足袋の「ナシ↓□(一マスアキ)」快き哄笑を聴きしか。

ああ「ナシ↓□(一マスアキ)」夥しき欲情は空にあり。
わが肉身は「ナシ↓□(一マスアキ)」卵殻の如く「ナシ↓□(一マス
アキ)」完く「か↓且」つ脆くして
陽光はほの「朱」↓赤↓紅↓朱「く」
「ナシ↓□(一マスアキ)」身う
ちに射し入るなり。

二二、一一、二七 完

3 詩帖稿

《草稿番号》 40191-37~38

《用紙》 詩帖 I 75-77頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○
幾日幾夜の熱病の後なる
濠端のあさあけを讃ふ。

琥珀の雲溶けて青空に流れ、
覚めやらで水を眺むる柳の一連あり。

もやひたるボートの赤き三角旗は
密閉せる閨房の戸をあけはなち、
暁の冷気をよるこび甜むる男の舌なり。

朝なれば風は起ちて 雲母めく濠の面をわたり、
通学する十三歳の女学生の
白き靴下とスカートのあはひなる
ひかゞみの青き血管に接吻す。

朝なれば風は起ちて 湿りたる柳の葉末をなぶり
花を捧げて足早に木橋をよぎる
反身なる若き女の裳を反す。
その白足袋の 快き哄笑を聴きしか。

あゝ夥しき欲情は空にあり。
わが肉身は卵殻の如く完くかつ脆くして
陽光はほの赤く身うちに射し入るなり。

Le 27 nov. 1922.

4 草稿4

《草稿番号》 40105

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降
に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、
20字×20行の字詰めとして使用している。

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程(1)

無題(旧稿)

幾日幾夜の 熱病の後なる
濠端のあさあけを讃ふ。

琥珀の雲 溶けて蒼空に流れ、
覚めやらで水を眺むる柳の一系列あり。

もやひたるボートの 赤き三角旗は
密閉せる閨房の扉をあけはなち、
暁の「空↓冷」気をよるこび甜むる男の舌なり。

朝なれば風は起ちて 雲母めく濠の面をわたり、
通学する十三歳の女学生の
白き靴下とスカートのあはひなる
ひかゞみの青き血管に接吻す。

朝なれば風は起ちて 湿りたる柳の葉末をなぶり、
花を捧げて足速に木橋をよぎる
反身なる若き女の裳を反す。
その白足袋の 快き哄笑を聴きしか。

ああ 夥しき欲情は空にあり。
わが肉身は 卵殻の如く 完く且つ脆くして、
陽光はほの朱く 身うちに射し入るなり。

《補注》 本稿は、「詩三篇」との総題のもとに清書された三篇の詩中
の第1篇である。これらは「(東京 文房堂製)」24字×10×2
行の原稿用紙全5葉に書かれ、第1葉2行目に総題「詩三篇」、

4行目に作者名が「富永太郎」と記され、6行目から「無題」、第2葉11行目から「熱情的なフーガ（旧稿）」、第4葉2行目から「無題（旧稿）」が記入されている。なお、草稿には、印刷のための指定が入れられ、本篇に対しては、「（旧稿）」に「六号」との活字号数指定がある。

8 横臥合掌

1 草稿

《草稿番号》 40127

《用紙》「東京 文房堂製」「10・25」原稿用紙（25字×20行） 1枚

《筆記具》 鉛筆

《校異》

横臥合掌

病みさらばへたこの肉身を
湿りたるわくら葉に横へやう

わがまはりにはすすくすと

節の間^{*}長き竹が生え

「をりをりに神経質な↓とき（書きかけて削除）↓冬の夜の黒い疾い」

風ゆゑに

茎は夏々の音を立てる

節の間長き竹の茎は

我が頭上に黒々と天蓋を捧げ

網目なす「ナシ↓その」一と葉一と葉は

夜半の白い霜を帯び
いとも鋭い葉先をさし延べ
わが「ナシ↓力ない」心臓^{かた}の方をゆびさす

《補注》 本紙葉には「横臥合掌」草稿の周囲にペン・ブルーブラックインクによる以下のような記入がある。

（右半分右端上部に横書きで）

Meine Freundin am Fenster von T. Murayama

（↑の下部に戯画1点あり）

（右半分下部に紙を横にして縦書きで）

○バーナードリーチ陶磁器展 二十八日より五月二日まで

流逸荘

○青騎手小劇場試演

五月六日夜報知社主催の下に表現派戯曲「転変」及びアナトールを上演すると、

○新興文学五月号

ブローク「十二」茂森唯士

【○ニイ↓削除】

○日本詩人協会洋画展

五月六日より十二日まで丸ビルライオンハミガキ展覧室で

《注》「バーナードリーチ陶磁器展」以下の各項は、大正12年

4月最終週の東京朝日新聞の彙報欄（「美術界」「学芸だより」）に掲載されている情報の抜き書きである。

（左端下半分を横にして縦書きで）

1) 海浜の井戸掘り。

2) 金魚の歌

- 3) ずり落ちる雪
4) 頭を垂れる馬

(1~4の下部にカッコして、「しっかりしろ!!」と記す)

〔雪〕↓削除 寺の門前の櫓 夢 (丸で囲む)

頭を金槌でなぐられた

〔?〕↓削除

倫敦の河岸。軍人探偵

(自転車に)

猫と箒草 (丸で囲む)

〔話〕てゐて詩を書くことを □□□□〔え〕なければ駄目だ。
さうでないと俺は一生何も出来ない。

散文詩

鳥獸剥製所 (この二行丸で囲む)

- 5) 石油の空カン
6) 船上の聖母 虫類焚殺、ライスカレー
7) 船の衝突 史蹟、靈肉一致説を奉ずる女 (この二行丸で囲む)
8) 海滝 (碇泊中の汽船、段々の竹林)
9) 風の歌、
10) □□会章
11) 産婦

Cheval qui Se baisse la tête.

《補注》「詩帖」13頁に詩篇題名列挙メモがあるが、その冒頭には

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程 (1)

「○横臥合掌」とある。

9 ゆふべ見た夢 (Etude)

1 草稿

《草稿番号》 40128

《用紙》「東京 文房堂製」「10・25」原稿用紙 (25字×20行) 2

枚

《筆記具》ペン、青インク。副題「(Etude)」は黒インク。

《校異》

ゆふべ見た夢 (Etude)

花の散ってゐる「ナシ↓街中の」桜「の↓削除」並木「の↓削除」
を通してゐた。灯ともし頃であつた。妙な侘しさに追ひ立てられる
「様↓削除」やうな気持ちで、足早に歩いてゐたやうだった。

道の左手に明るいカフェが口を開いてゐた。入口に立って覗くと、
酒を飲んでしゃべってゐる群の中に知った顔が二三人見えた。あまり
会ひたく「ナシ↓も」ない人たちだったので、「僕」↓削除「僕はし
ばらくそこに立ったまゝでゐた。」

そのとき「隅↓奥」の勘定台の「ところ↓わきの壁」に倚りかゝつ
てゐるNが眼に入った。中学のとき同級で、海軍兵学校に入つてゐる
うちに肺炎か何かで死んだ男だ。むかふでも僕を見つけたものと見え
て、「昔↓むかし」した通りに、頑丈なからだを少し前の「め↓め」
りにし、新兵のやうに二の腕をぶら「ふ↓削除」ぶら振りながら、
「人を掻き分けるやうにして↓うれしさうに」こつちへやって来た。
僕もへんに「うれしくなつて、↓うきうきした気持ちになつて、」い
きなりその胸の厚いからだを抱きしめて額に接吻した。「↓……」

突然、予期しない不快な感覚を額面に覚えて手を放し「た。↓削

除」てみると、Nの反面は、髪の毛から眼の下へかけて一面に褐色のどろどろした液体で被はれてゐる。しかしその液体の不快感を顔に感じてゐるものはたしかに僕である。夢の中ではこのことが少しも不自然ではなかった。Nは僕の顔にその液体を吐きかけたのでもないければ、僕の口から出たその液体を吐きかけられたのでもないやうに、平静な顔に、うれしさうなうす笑ひを浮べてやっぱ僕をみつめてゐる。しかし僕はもう一度彼を抱きしめる気になれずに、ぼんやりそこに立っ「てゐた。↓たまゝ【でゐた。↓削除】よこれた彼の顔を「みつ↓削除」眺めてゐた。

10 COLLOQUE MOQUEUR

1 草稿

《草稿番号》 40129

《用紙》「東京 文房堂製」「10-25」原稿用紙(25字×20行) 1枚

《筆記具》 ペン、青インク。手入れは、鉛筆・黒インク。

《校異》

COLLOQUE MOQUEUR [(No2) ↓(鉛筆で) 削除]

[「マリアが立去ったとき……マラルメー(黒インクで) 削除]

[ナシ] ↓(黒インクで) Depuis que Maria n'a quitté pour aller dans une autre étoile — Mallarmé]

立ち去った私のマリアの記念にと
友と二人アップサントを飲んだ帰るさ
星空の下をよろめいて、
互の肩につかまり合った。

——もうあの女に会へないと「き↓決」まつたときは
泣いたせいで、俺は結膜炎に罹つたつけ。
——さうさう、すると、眼を泣き潰したといふ昔話も
まんざら嘘ぢやないかもしれない。

さる「高い↓いかめしい(鉛筆で加除したのち黒インクで重ね書き)」黒
堀の角を曲つたとき
球を突くキューの「ナシ↓(黒インクで) 花やいだ」響きに
見上げる眼にふと入つた
薔薇色の天井に「蜘蛛手に↓(青インクで) 削除」張りわたした蜘蛛
手の万国旗……

Avril 1923.

2 詩帖稿

《草稿番号》 40131-25、26

《用紙》 詩帖 I 50-51頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

COLLOQUE MOQUEUR

[Depuis que Maria n'a quitté pour aller dans une autre
étoile…… Mallarmé → 削除]

立ち去った私のマリアの記念にと
友と二人アップサントを飲んだ帰るさ
星空の下をよろめいて、
互の肩につかまり合った。

——も「の↓う」あの女に会へないと決まつたときは

泣いたせいで、俺は結膜炎に罹ったつけ。
——さうさう、すると、眼を泣き潰したといふ昔話も
まんざら嘘ぢやないかもしれない。

さるいかめしい黒塀の角を曲つたとき
球を突くキューの花やいだ響きに

見上げる眼にふと入った

薔薇色の天井に張りわたした蜘蛛手の万国旗……

Avril 1923.

11 即興

1 草稿

《草稿番号》 40130

《用紙》「東京 文房堂製」「10・25」原稿用紙（25字×20行） 1

枚

《筆記具》 ペン、ブルーブラックインク。

《校異》

即興〔品↓削除〕

古池の上に

ぬつと突き出たマドロスパイプ。

下ではあめんぼが

番つたまゝすつと走る。

しやがんだ散策者の

吐き出す煙が

池の「上↓中」で夕焼雲に追ひすがる。

Avril 1923.

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

2 書簡稿

《草稿番号》 「ナン」

《用紙》 正岡正三郎宛書簡（1923年5月1日付）

《筆記具》

《校異》

即興

古池の上に

ぬつと突き出たマドロスパイプ。

下ではあめんぼが

番つたまゝすつと走る。

しやがんだ散策者の

吐き出す煙が

池の中で夕焼雲に追ひすがる。

《補注》 正岡忠三郎宛書簡（1923年4月19日付）に次の様にある。

ラフォルグのことをきいて不思議に思つた。こつちへ来てから、毎日夕方庭の隅の泥池のふちにしやがんで光る水を眺めながら煙草をふかしてゐると、奇妙にいつもラフォルグのことばかりしひ出して急によみたくなる。

3 詩帖稿 1

《草稿番号》 40191-23

《用紙》 詩帖 I 46頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

即興

古池の上に
ぬつと突き出たマドロスパイプ。
下ではあめんぼが
番つたまゝすつと走る。
しやがんだ散策者の
吐き出す煙^{けむ}が
池の中で夕焼雲に追ひすがる。

4 詩帖稿 2

《草稿番号》 40191-35
《用紙》 詩帖 I 72頁
《筆記具》 鉛筆
《校異》

○即興

古池の上に
ぬつと突き出たマドロスパイプ。
下ではあめんぼが
番つたまゝすつと走る。
しやがんだ散策者の
吐き出す煙^{けむ}が
池の中で夕焼雲に追ひすがる。

Avril 1923.
à Nagaoka.

Avril 1923.
à Nagaoka.

12 晩春小曲

1 草稿

《草稿番号》 40131
《用紙》 「東京 文房堂製」 「10・25」 原稿用紙 (25字×20行) 1
枚
《筆記具》 ペン、黒インク。最終行の「なり。」の手入れのみブ
ルーブラックインク。

《校異》

晩春小曲

五月のほのかなる葉桜の下を
遠き自動車は走り去る。
わが欲情を吸収する
堀ばたの赤き尖塔よ。
埃立つ道に沿ひて
兵営の白き塀は「限りな【く↓く】連なる。↓曲【る。↓りゆく。】
【ナシ↓なり。(ブルーブラックインクによる加筆)】

Mai 1923.

2 詩帖稿

《草稿番号》 40191-35
《用紙》 詩帖 I 71頁
《筆記具》 鉛筆
《校異》

○晩春小曲

五月のほのかなる葉桜の下を
遠き自動車は走り去る。
わが欲情を吸収する
堀ばたの赤き尖塔よ。
埃立つ道に沿ひて
兵営の白き塀は曲りゆく。

Mai 1923.

13 熱情的なフーガ

1 草稿1

《草稿番号》 40132
《用紙》「東京 文房堂製」「10-25」原稿用紙（25字×20行） 1
枚
《筆記具》 ペン、黒インク。
《校異》

第一形態は次のとおり。

熱情的なフーガ

1七月の日光の
多彩なるアラベスク。

七月の日光の
覆された垣塙。

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程（1）

5 白昼の星より
女人の肉は墜つ。

このロコ、風の
殿堂を毀て。

立ちならぶ電柱は

10 火を発す。

多彩なるアラベスク。

覆された垣塙。

「〔?〕↓立」ちならぶ電柱は
火を発す。

Mai 1923.

これに対して、次の手入れがなされた。

（9・10行目を棒線にて削除。その右側に次の二行を追加）

あでやかなる大理石の
噴泉を止めよ。

（次いでその右側にさらに二行を追加）

赭き肉は
宇宙に倒しまなり。

以上の手入れによる最終形態は次のとおり

熱情的なフーガ

七月の日光の

多彩なるアラベスク。

七月の日光の

覆された増塙。

白昼の星より

女人の肉は墜つ。

このロコ、風の

殿堂を毀て。

赭き肉は

宇宙に倒しまなり。

あでやかなる大理石の

噴泉を止めよ。

多彩なるアラベスク。

覆された増塙。

立ちならぶ電柱は

火を發す。

2 詩帖稿

《草稿番付》 40191-36

《用紙》 詩帖 I 73、74 頁

《筆記具》 鉛筆

《校異》

○熱情的なフーガ

七月の日光の

多彩なるアラベスク。

七月の日光の

覆された増塙。

白昼の星より

女人の肉は墜つ。

このロコ、風の

殿堂を毀て。

赭き肉は

宇宙に倒しまなり。

あでやかなる大理石の

噴泉を止めよ。

多彩なるアラベスク。

覆された増塙。

立ち並ぶ電柱は

火を發す。

Mai 1923.

Mai 1923.

3 草稿2

《草稿番号》 40105

《用紙》 「(東京 文房堂製)」原稿用紙24字×20行、セピア罫

《筆記具》 ブルーブラックインク・ペン

《校異》 本稿は、原稿用紙の上部4字分を空白にして5段目以降に記入されている。すなわち、24字×20行の原稿用紙を、20字×20行の字詰めとして使用している。

熱情的なフーガ(旧稿)

七月の日光の
多彩なるアラベスク。

七月の日光の
覆くっかへされた垣塙。

白昼の星より
女人の肉にょにん しくむらは墜つ。

このロコ、[風↓宮殿]の

[殿堂を毀こぼし。啖へ。↓脚を断て。]

赭あかき肉しくむらは
宙宇さかしまに倒たふさなり。

[あでやかなる↓大理石なめいしの噴泉の]

[噴泉を【止とど】【?】(書きかけ)め↓削除]めよ。↓吸へ。↓涸ら

富永太郎生前未発表詩篇の生成過程(1)

せ。】↓臂を嘯め。]

多彩なるアラベスク。
覆された垣塙。

立ちならぶ電柱は
火を発す。

《補注》 本稿は、「詩三篇」との総題のもとに清書された三篇の詩中の第2篇である。これらは「(東京 文房堂製)」24字×10×2行の原稿用紙全5葉に書かれ、第1葉2行目に総題「詩三篇」、4行目に作者名が「富永太郎」と記され、6行目から「無題」、第2葉11行目から「熱情的なフーガ(旧稿)」、第4葉2行目から「無題(旧稿)」が記入されている。なお、草稿には、印刷のための指定が入れられ、本篇に対しては、「(旧稿)」に「六号」との活字号数指定がある。

〔付記〕 本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C))課題番号23520238「富永太郎直筆原稿の画像データベース化による文学テキストの生成研究」の助成を受けたものである。